

東北三地域 横断座談会 から版

久之浜 Ⅱ 編

Vol.2/3

「かわら版について」

このかわら版は、平成時 24 年 10 月 17 日に開催された東北三地域・横断座談会「久之浜Ⅱ編」の要旨をまとめ再録したものです。

【はじめに】 露口典子 (司会・進行)

まず、私たちがどうして久之浜を訪ねたのかという事ですが、これは非常に偶然でした。もともとは、田村のお人形様の衣替え行事を見せたいと旅に栗田さんをお誘いしたところ「今、久之浜にいます。まちづくりのサポートをしています。田村は久之浜の近くなので、田村まで行くなら案内します」と言っていたので、「じゃあ、久之浜も言ってみようか」という成り行きでした。

田村はとても美しい田園風景が広がる所ですが、いわき市に入ると段々風景が変わってきます。

汚染土を詰めた黒い袋が連なり、「ここです」と言われた海の方は建物は何も残っていません。地震の後の津波、そして、火事で全部焼けてしまった訳です。僅かに残っているのは神社だけ、それは衝撃的な風景でした。



写真① 座談会の様子 / (左から) 濱中さん、栗田さん、木村さん



写真② -a 海側より



写真② -b 山側より



【久之浜の位置】 久之浜は福島県の南、いわき市の北側の海沿いに位置し久之浜町と大久町の二つの町と隣の 14 の市町村が合併しいわき市になった。福島第一原子力発電所から 30 キロ圏内を掠るところが久之浜町である。

●濱中 峻 (映像演出家、サポートチーム・パフォーマンス担当) 会場のダウンライトが消え、氏一人による約五分のパフォーマンスが行われて本会がスタートしました。(内容略)

「このパフォーマンスは「かげろう」と云います。久之浜の取材を一年程しておりまして、今回特に漁業関係者にインタビューして、その取材の音声を聞きながら喋るといふパフォーマンスを会の冒頭に行いました。

今聞いていただいたのは、間接的な現地の皆様の声です。かげろうという名は、夏場のアスファルトの暑気楼のようなものです。私はこのサポートチームに所属して、この様に久之浜と縁が出来て、東京の人はどうしたらよいのかと考えた時に、遠くへばやけて見えていた久之浜をきちんと扱いたいと思っただけです。

●露口 (司会) 濱中さん、有難うございました。それでは栗田さんに久之浜の位置関係また、今回のゲストの皆様のご紹介をお願いします。

●栗田祥弘 (建築家、久之浜大久地区まちづくりサポートチーム共同代表、コミュニケーター) まず、久之浜からお越しいただいた方々をご紹介します。

●松本光司先生は、2011年8月から2014年8月まで久之浜第一小学校の校長先生をされてきました。そして震災後の子供たちの環境をどのように整えていくかを現場でご尽力された名物校長です。

●木村謙一郎さんは、生まれも育ちも久之浜で、大学卒業後はイギリスのバーミンガム大学でエジプト学を学ばれた方です。60歳からいわきに戻ってご実家の水産加工会社に入り、65歳で社長に就任されました。そして6か月後に震災に遭われ、会社もすべて流されてしまった経験がされました。震災後は何か町のために出来ないだろうかと考え、市議会議員になり、復興に尽力されています。

それでは、映像から久之浜をご紹介します。

ます。これは航空写真で、久之浜の一部です。海岸沿いの部分が久之浜、山の側を大久といひ、合わせて久之浜・大久地区となります。

久之浜というと、ほとんどあのぼつんと立っている神社の風景が象徴的になっています(写真①内の映像の写真)。先ほどの6年後のもので、やはり最初の一年後のはガレキが周りにありました。現在はガレキ・コンクリート基礎とも撤去され、その後はゆつくりと防災緑地の施工が進められています。防災緑地は、幅2メートル長さ6メートル以上で海拔1.5メートル程度の堤防となります。

露口 木村さんは震災当時ここ久之浜に居たのですか。実は、友人が震災直後に行ける北限がここ久之浜までだったとメールをくれました。無事に避難されたのですか

木村 ここに居ました。その時自宅におりましたが、6階でしたので流されず家族は無事でした。夜になると火災があり、山の上からは止められず見ていながら一夜を過ごしました。そして、次の日は第一原発の事故の影響で、市の指示で私たちは自主的に非難するように言われ、最初埼玉の親戚に避難し、最終的には私以外の家族は妻の実家の広島に行きました。

露口 私たちは今のこのような久之浜しか知らないのですが、先ほどの濱中さんのパフォーマンスに海の幸の話がありました。かつて久之浜はどんな町だったのですか。

木村 昔から漁師町として発達してきて、久之浜は海水浴場でした。私が小学校の6年生の頃に、波の影響で砂浜が縮小してきました。南に波立海岸があり初日の出で有名ですが、そこにはまだ海水浴場があります。父や祖父からの話ですが、昔はこのような大きなマグロも獲れたそうです。久之浜では殿上山が象徴的です。その北側に港と市場があります。街の写真では、6件のオレンジ色の屋根の家を境にして海側が大きな津波の被害を受けました。そして大通りの右手がほぼ壊滅状態になりました。このあたりは住宅地で、私の自宅も写真の端、左側にあります。

毎年、久之浜では5月の連休に祭があり、お神輿の巡行、こどもの練り歩きがあります。これは遠景から見た海岸(写真②)で、ここに元々、古い堤防がありましてこれに重なる形で新しい堤防が出来ますので、将来は町から海が見えない状況になるのかなと思います。昔は、漁師の皆さんがお神輿を担いで海に入って、とても賑わっていました。

町の唯一の久之浜第一幼稚園も今回建物は被災しましたが、幸い人的被害はありませんでした。建物は解体されたので、子供たちは関連の幼稚園にお世話になっている状況で、近いうちに再開したいと思っています。

津波の後の火災がありました。建物の破壊された可燃物・木材が浮かんでいる状況で、水に囲まれていたのです。プロパンガスが爆発する音が聞こえてきましたから、それから引火してしまおうとあつという間に火が広がります。消火栓はガレキで覆われ消火活動が出来ません。消防隊の人たちも燃えるに任せ、見ているしかありません。また、次の津波警報などが出され避難せざるを得なく、活動の中止で更に火が広がりました。

この地域には4500人もの方がいます。津波の被害は地区の一部でした。非難するには問題はなかったのですが、その後の原発の事故で、家がある人もすべてこの地区から避難しなければならなくなりました。

露口 震災後、松本先生は赴任されたわけですね。いわき市には小学校は幾つありますか。

松本 その年の8月から久之浜第一小学校に赴任しました。いわき市には小学校が14校、中学校も合わせて28校あります。久之浜大久地区では小学校2校、中学校1校があります。震災前は久之浜第一小学校は28名、第二は10名、中学校は18名おりました。(写真②bの左側の地区辺り)ここに700棟の家がありました。そして崩壊してガレキとなった景色、そして幼稚園。これは久之浜の学校ではないのですが、地震で校庭がグラウンドキャニオンのように幾つもの段差が出来てしまいました。これを復旧するのは大変で、今年の9月まで掛かってやっ



写真② 座談会の様子 / (左から) 松本さん、露口 (司会)

と運動会が出来るようになりました。震度の強の地震の凄さ、活断層による地割れによる被害の大きさ大変さが分かると思います。

震災直後、全町自主避難ということで町から子供たちがいなくなっていました。全町自主避難が終わったのは6月28日でしたのでそれまでは町に子供がいなかった状況でした。その当時、線量が高くて28シーベルト位ありました。

4月1日からいわき市の学校が再開しました。久之浜では再開されず、久之浜第一小学校はいわき市の中央にある中央台北小学校を借りて再開することになりました。その年の予定では久之浜の約200名の子供たちが生活する予定だったので、遠くに避難する子供達がいて、4月8日の開校したときは12名でのスタートとなったと聞いております。

避難先の学校では、教室はすでに埋まっていますので会議室を借りて一緒に生活で、8月1日に赴任した時にはキッズで暑くて大変でした。更にびっくりしたのは保健室に来る子供たちが一日に10〜8人、ノートに書ききれないほどでした。理由は何かというところ、みんな気分不快ということ。僕はどういう事かなと見ていると、子供たちはトイレに行くのもその学校の児童の後ろに並び、大好きな休み時間校庭では、その児童たちが先に場所を決めた後に遠慮がちに、その隙間で縄跳びなどを遊んでいました。その学校ではとてもよく

してもらったのですが…。避難するのは例えば、親戚でしたら2〜3日は良いのですが、それが一週間、10日ともなると段々居心地が悪くなってくると思います。そしてこの子供たちはその間借り生活が半年間続くことになりました。

朝はバスで送られて来ます。久之浜から約一時間かかります。これも子供たちにとってはストレスなのではないかと思えます。このような生活をしていましたので、子供たちが壊れてしまっているのではないかと、避難・仮設、元に戻れない状況の中で、学校生活ぐらゐ元通りに戻れたら子供たちは夢や希望が持てるのではないかと、元の学校に戻る作業を進めました。そして2月2日、震災から1か月後、やっとその時が来ました。最初に出来たのが仮設の商店街で、校庭の敷地をお貸ししました。久之浜小学校は、漁業がさかん頃は約1000名の子供たちがいた小学校なので校庭は広いし、校舎も2階建てです。広い校庭なので地元の人々に戻る時にお店があるという事でお貸しした訳です。

商店街の真ん中の所は、人が来るとおもてなししたり、ちよつとした空間をとて有意義に使っています。

露口 子供たちにとっても嬉しかったのではないのでしょうか。

松本 そうですね。実はこの商店街の門の所にスクールバスが停まるんです。100名で学校がスタートしたのですが、地元の子は60名しかいません。残り40名は市内からバスで送られて来ます。実はこの商店街の叔母ちゃん達は、バスが来る時・帰る時に必ずここに来て、「おはよう、ちゃん」と宿題やれよ、と、店にお客がいても来てくれます。子供たちはここを通るたびに久之浜の良さを感じてくれたのではないかなと思います。

露口 子供たちは久之浜に帰りたいと願っていると聞くと、親は他に移ろうと考えていたのに…、というお話を伺いましたが。

松本 6月中に除染作業をしなければならなくなりました。このような手作業で8月から始



写真③ 久之浜第一小学校に戻った教室で

めました。東京からボランティアの人に来てもらい、ありとあらゆる草を取ったり、土に線量が多いという事で校庭の土を5cm削って、学校の真ん中に約5メートルの深さで、プール8個入る大きさを掘ってもらい、放射線が絶対漏れないというシートを張ってここに埋めて除染を行いました。安全基準0.02シーベルトを下回り0.02までになり、保護者の方々に学校に戻れますよとお話ししました。教育委員会はとても親切で、それぞれの家庭に学校に戻るかどうかの調査をし、最後に僕は抵抗したのですが、もし希望があれば好きな学校に転校するよう配慮します、との事でした。つまり、今避難している近くの学校でいいですよ。と言ってくれたので、僕は先生たちと、戻るのは半分くらいかなと思っていたのですが、実際戻ることのお知らせをしました。避難していた子供たちも加わり100人が戻るようになりました。ただ、お知らせを出して戻ってくるまでというのは、6月の最後の1週間だったのですが、学校がどんよりとした雰囲気なのです。なんでかなーと思いましたが。保護者の人たちは「校長先生、大変でしたよ！」って、親は朝大変だから近くの学校に行きなさいと勧めたそうですが、子供たちは久之浜に行きたいと、ずーと親たちを説得したのだそうです。

ここに木村さんがいらつしゃいますが、お嬢さんは今の時の0分にバスに乗って、学校に着くのが8時です。一時間ほど乗ってきます。最

初ちゃんと起きるからって家の人に約束するんです。「朝早く起きます、お勉強もします、宿題もちゃんとします」と。でも嘘ばっかり(笑)。想いと現実はそのいかなかったのですが……。

子供たちは何とかして学校に戻りたい、自分の学校で心置きなく走り回りたい、という気持ちで親を説得し、親は子供たちに賭けて従ったと言っていました。

ここに木村さんがいらつしやいますが、お嬢さんは今の時の分にバスに乗って、学校に着くのが0時です。一時間ほど乗ってきます。僕は忘れもしない10月2日、学校再開の日に、地元の子供が先に学校に来ていて、校庭からスクールバスの子供たちが来た時に「おかえり」って迎えてくれました。その日の職員会議で僕は先生方有難うと言いました。どんな大変な時でも子供たちのことを考えてやってくれたので、子供たちは学校が楽しい、友達といるのが楽しいと思つて戻ってきてくれました。この子供たちをこれからも大事にしようね、とその日は先生方にお話ししました。

露口 本当ですよ、そういう学校だと戻りたいですよ。先生は何人いらつしやるのですか？ハイタッチで子供たちを迎えられたと聞いているのですが……。

松本 全部で二人です。

露口 ハイタッチで子供たちを迎えたと聞いているのですが……。

松本 一時間ちよつとぐらいバスに乗っていると、ほとんど眠っているんですよ。「おはよう」って声を上げると目を覚まし、下を向いていても挨拶の声は出来るのですが、顔を上げて学校に入ってくるように、(ハイタッチのように)手を合わせて迎えました。

栗田 僕はサポートチームで学校に行く度に、松本先生が子供たちと一緒に遊んでいるのを見ていました。どっちが子供か分からないくらいです。

それがとても印象的で、僕の年でもなかなかあんなふうに遊べないなど……。駆けずり回っているんですよ。相撲場の周りとか……。あともう一つ印象的だったのは、浜風商店街に行つ

写真⑤ 震災後、夏のプールへ (2014年7月)
(下) 除染作業中。
(左) 3年ぶり念願のプールへ。夏はプールだね。



写真⑥ 久之浜にてサポートチームが最初に行ったワークショップ (2012年10月)。現地の方々の思い出を付箋に書いて地図上にマッピングしていく。

た時に、ふらふらと歩いていると子供たちが、「こんにちは、何しに来たの？」と声を掛けてくれるのです。多少人見知りの所はありますが、東京ではほほえない感じだなーと思っていました。

露口 木村さん、お嬢さんが通っています、震災後どんな感じだったのですか。

木村 私の娘は半年くらい実家に居たのですが、学校が再開されるタイミングで5月に久之浜から20キロぐらいの所に戻り、そこからスクールバスで通いました。私はここが母校なので、どうしても娘は自分の学んだ学校に通わせたい、という事がありまして小学校一年ですから親の判断で決めました。

確かに朝早くバスに揺られて、最初の頃は疲れていたようですが、子供は順応性が高く、今は元気に通っています。でも、バスでの一時間余りはロスなのかと感じ、友達との会話もあるでしょうが、正直、本当は自分が送って行って、親と会話した方が良くないかとも思います。

早く公営住宅など出来、地元に戻れば歩いても行けますので、それまで頑張っていなければと思います。

松本 学校を再開した時にびっくりした光景がありました。先ほど町から子供たちが消えたというお話をしましたが、子供たちの声を聴きにおじいちゃん・おばあちゃん達が学校に来るんですよ。休み時間に、子供が「校長先生、変な人がいます」と言うんですが、近所のお爺ちゃんやお婆ちゃん達なんですね。運動会の練習とか、授業参観・発表の時とか、町の人みんなに知らせていたのですが、多くの人たちが子供を見に来てくれて、今まで以上に沢山の大人たちが、子供たちが頑張っている姿を見てくれるようになりました(前頁・写真④)。

露口 子供たちの姿は、本当に私達も元気にしてくれませんか。

松本 学校は再開しましたが、実は出来ないことが沢山ありました。全部放射能の影響なのですが、プールも普通に掃除出来ませんでした。子供に掃除させるな、高い線量なので保護者のお母さんたちにも手伝ってとは言えませんが、専門の業者に除染してもらい、やっと入れる

ようになりました。プールはこのようにきれいになりましたが、実は先生方で一週間掛かってプールを塗ったのです。子供たちにとっては3年ぶりに入りますので、きれいにしようと、夕方の時になってからライトを点けてペンキを塗っていると、近所の人たちが手伝いに来てくれるのです。「何やっているの？」と、プールを塗っているんです」と答えると、近所・役場の人々が集まりました。でも、プール再開の年は、約20名くらいの子供たちは、放射線が心配だからとプールに入るのを拒否しました。それは子供たちというよりも親御さんが心配したのです。そしてその20人には、プールの時間は職員室でドリルの勉強をさせました。

次の年、昨年なのですが、プールに入らない子は誰もいませんでした。これもきつと、自分たちで親を動かして、自分たちは入りたいと言つて説得したのでしょう。私は、子供の力つてやっぱりすごいなと思えました(写真⑥)。

露口 学校が楽しいという……。

松本 先ほど、木村さんが言われたように、一時間かけて学校に来てくれる子供たちには、学校の学校の時間の0時半から0時半までは、どの学校にも負けない楽しい時間にしてあげたいと思つて、先生方と一生懸命、いろいろなことに取り組んでいます。

栗田 こういう子供たちは、すごく良い印象。思い出を学校に持つて卒業する訳で、これが町づくりの根幹なのではないかと思えます。学校に愛着がなく、仲間も面白くなくて日々でいらしていったら、将来絶対その町に戻って来たくないと思うんですよ。その中で想いを持って、時間を掛けて久之浜に通学する子供たちに対して、最大限の誇りと愛情を与える活動に、非常に感銘を受けました。

露口 次に、町づくりサポートチームのお話を伺います。

栗田 共同代表をしている建築家の基が東京デザイナー学院・建築学科の非常勤講師をしていました。実はその先生の一人が震災後すぐに福島に視察に行き、先ほど少し話がありました。が、その当時の北限、つまり東京から福島

発の方に向かったの北限が久之浜まで訪れたのです。ここが行き止まりだったのでもしかりと久之浜を観たようでした。そこでせつかくですからその復元模型を作ろうという事になり、デザイン学院と学生達が一緒になって模型を作りました。その後作ったままで何もせずに学校に置いてあった訳です。そしてある時、基氏が写真を撮ってツイッターに載せましたら、いわきの人が見て「それは久之浜ですよ」とって、ツイッターで返事が返ってきて、その復元模型を久之浜に持って来てくれないか、という話があり、関係が生まれました。

露口 その模型を持って来てくれませんか、という人が小澤洋平さんですか。本日お見えではないのですが…

栗田 そうです。いわきにお住いの小澤さんは震災直後のガレキ撤去の際にサポートされた方で、久之浜の出身ではないのですが、友人を連れて週末や時間の空いている時に、進んで久之浜のガレキの撤去の活動をして、ここに愛着を持った方です。

露口 (サポートチームのプリントを見て) お隣の遠藤論さんという方はいわきの方ですか。

栗田 今も久之浜で建具屋さんをやっています。

露口 このメンバーはほとんど学生さんですか
栗田 ほとんどという訳ではないのです。建築関係の社会人が割プロジェクト毎にリーダーを立てて、そこに興味がある人が集まり仲間を増やしてゆくという形で、今、総勢で100名を超えています。

実は皆は深層心理で、東北の震災に対して何も出来ない自分に、見えない力で苦しめられた様な所があったのだと思います。自分出来ることは何か、では自分が何か企画を出せば何か出来るというところが、結果としてサポートの輪として広がって行ったんだと思います。

露口 実際どのようなサポートをしていたのか見せていただけますか。最初のワークショップの奉奠祭とはどのようなものですか？

木村 震災当初から、若いボランティアの人達が集まってきてくれています、そういった方と地域の諏訪神社の若い方と力を合わせて復興をめ

ざすような、そして鎮魂の意味もあるんですね。奉奠祭にはそういった意味で犠牲者の方の「追悼」でもあり、「花火大会」であります。

2011年の震災の年にやり、これが一回目だったのです。今は奉奠祭は違った名となり「復興祭」という名前に変わりました。

濱中 私が奉奠祭でワークショップをやらなかつたといういわれ、元々、東京デザイン学院の建築の学生として基さんと出会い一緒にやってみよう、誰かワークショップをやらなかつたか話されました。そして学生の中から有志3名がいて、社会人の建築家の方々も含めて実現しようという事で進んでいきました。

その中の一つで、私がプロジェクトリーダーを務めたのが「おもいでカフェ」というものです。この久之浜でワークショップをやるうとしても、自分がやりたい事で本当に良いのだろうかと思っただけです。その時点では久之浜の事がよく分からなかつたので、それでもツイッターとか、小澤さんのネットワークだったりとか、現地でお会いした遠藤さんとの縁から、まず町の事を知ろうということ、ヒヤリングのワークショップをやってみました。

(映像を見て) 木製の机の上に90分の久之浜の地図が描いてあります。お祭りの時には皆んなが来ますよね。その中に出展ブースとして、これを置きました。そして来た人は机の上の地図を見ながらいろいろ思い出話をします。つまり私たちが知りたいのは震災前はどんな町だったのか。ここに元々根付いていた文化を知り、その上で何かできるかもしれないと思っただけです。そこで現地の人たちにインタビューして、その場で聞いた言葉を、当日来ているサポートメンバーがメモを取り、付箋を地図の上にマッピングするというワークショップをやりました(写真⑥)。

このように個人的な思い出が集まり、昔の写真なども一緒に明示し一緒にコメントなども書きました。非常に単純なワークショップでした。

露口 濱中さんのパフォーマンスとの関係は？
濱中 この事とパフォーマンスも同じように繋がっています。2013年にこのワークショップ

をやりまして、2013年もとにかく久之浜に係わっていいことという事になり、2014年になってから、ようやく何かもう一つやらなきゃと思いい、先ほどのパフォーマンスを始めました。

露口 これも一つのワークショップですが、他にもありますか？

濱中 あと一つありますが、その中の一つをご紹介します。

本日お越しのサポートチームの森田さんがされた「久之浜ってどんな浜」があります。これは久之浜の防災計画に合わせて、久之浜をどんな浜にしたいのか、どんな浜になってゆくの。そこにどんな選択肢があるのか分からなかつた、と伺っております。防災緑地であるけど、どうしたら良いのか、どんなものが出来るのか分からないということで、建築の学生が中心になって、防災緑地にどんなアイデアがあるのか考えて、4つの提案を出しました(写真⑦)。

(映像を見て) 画質が悪いですが、現地の花の浜エンドウの花畑、これを防災緑地に作ってゆくと、デッキを作り桜の木を植えたらどうかとか、また、竹林を作ったらとか、商業施設に防犯展を作るとか、4つのアイデアを出しました。そして、ちょっとした装置の覗き穴を作り、そこから子供たちが覗いて一番良い物を選んで



写真⑦ 久いわき市立久之浜第一小学校と連携したワークショップ / テーマ:「久之浜防災緑地について考えよう」。子供達は楽しんで自分たちの町の未来について真剣に議論した。

もらって、皆んながどれが良いかを調べるワークショップをしました。

栗田 今、子供たちが映っています、半分いや自分のぐらいは大人たちだったのでしょうか。皆さん真剣にみて、こういうのは嫌だとか、選択肢の中で選んでいました。

松本 先ほどの模型を見ていて、あのまま何処かに置いておくのはもったいないと思いい、学校に貰えないかという事がキッカケとなり、お話が始まったのです。

実は、震災で何かお手伝いが出来ないかなと思っただけです。どうせするのなら、困っている人達にしたいですよ。津波で家がないう人や、放射線で避難している人とか。僕は校長として学校に来て、先ほど申しました様に、最初に久之浜に戻った90名の子供たちには何も無いんです。避難先で集合住宅にいる人たちには東京などからいろいろボランティアの方が来て助けたりしているのですが、覚悟して地元に戻っている人たちの所には誰も来ないという事があり、この子たちに、地元に戻って良かったなと思わせたいなという気持ちがずっと胸にありました。幸い、サポートチームの皆さんと一緒に机を囲んで、「何か出来る事は有りませんか?」という事だったので、子供たちが楽しい事ややっていただけませんか、学校はいくらでも貸しますから」という事で始まりました。

最初は「豆まき」でした。デザイン学校の人達なので、素敵なお面を作ってくれますが、それだけでは子供たちは楽しくないのです。やっぱり、そこにお菓子があつたり、実際に豆まきしたりが必要です。デザイン・建築の方々は図面で画いてキチッとやるのでお面作りは上手なのですが、楽しい会にするのはなかなか難しいのです。

栗田 お前ら！楽しくできなかったら二度と使わせないぞ！と松本校長に脅迫をうけていました(笑)。それが一月の30日でした。ちょうど一番近い1ヶ月の日がまたま節分でした。それだつたら鬼が必要という事と、楽しくしようと考え、単に鬼の絵があつて、そちらに豆を投げるのではなく、自由な組み合わせで鬼の顔を

作れるようにし、お面作りも楽しいものにしてしま
した。それらの合間で模型作りへと巻き込んで
いきました。どこが自分の家とか、どこで楽し
い思い出があったとかを話ながら。

栗田 サポートチームにお願ひした事の一つ
に、(子供たちにとつて)今しかできない久之
浜の良さを知らせたいということ、確かに
津波でも無くならないとしまいましたが、その分
星がきれいに見えるので、星空の観測会をやり
ました。この時はとつても寒かったので、星空
だけではつまらないし、そこで豚汁を食べさせ
ここで初めて地元のボランティアの皆さんと一
緒になって、体と心の温まる企画をしました。

栗田 婦人会の皆さんがとつても楽しくやっ
たいて、とつても助かりました。
露口 次に神社のお話しですが、若者たちが神
社の冊子(当日会場配布)を作つたのは意外
でした。2013 年 4 月に私たちが久之浜に行つ
た時に、5 月の連休に神輿を担ぎに行くとい
てくれましたね。

栗田 最初、神社について考えるというキツカ
ケをいただいたのは町の宮司さん。諏訪神社・
久之浜総鎮守の高木宮司さんでした。この宮
司さんが久之浜の神社をすべて管理しており、
2013 年の 5 月に、先ほどの昔の写真で見たよ
うな合同神幸祭をしました。

震災後、2 年が経ち、ようやく合同神幸祭で
神輿担ぎが出来るようになりましたが、宮司さ
んは担ぎ手を心配していましたが、人が来
るのか戻るか、祭の為に来られるだろうか。
良い知恵はないですかと質問されました。我々
は地元の人間ではないし、東京から来た人間に
どういふ事ができるか、そこで考えました。
何故お祭りをしなければならぬのか、何故お
神輿を担がなければならぬのか…。

実はそこがはつきりしてくると、地元の人達
も意味を理解したことで参加してくれるのでは
ないかと思ひました。お祭りの為だけに、避難
している人達も久之浜に戻つて来てくれること
だつて有り得る訳です。それではそのルーツを
探る本を作つてみよう、という事から冊子作り
が始まりました(写真 3)。

露口 木村さんは子供の頃からお神輿を担いで
いたのですか。

木村 ええ、これは大人神輿で大きなものです
が、各地区に子供会がありまして、そこに子供
神輿がありましたから、地区に住んでいれば子
供の頃から担いでいます。(映像を見て)これ
が子供神輿で昨年のものです。

栗田 子供たちは避難先から駆けつけて、子供
会で皆楽しく担いでいました。

露口 東北に来ると必ず神社が残つていたり、
またそこに避難した人が助かつたという話をあ
ちこちで聞きます。これは矢張り意味のあるこ
となのでしょね。震災の時も、津波でも残つ
ている。

栗田 この冊子を作る時に子供から大人まで見て
もらいたいと思ひました。そこで松本先生にお願
ひして、全校生徒に配つてもらいました。少しで
もこのお祭りに参加してほしいし、子供に渡せば
親も見て、何か感じていただければこの冊子の
意味があるのではないかと思ひました。

昔からある神社はかならず津波から生き残つ
ている。一ヶ所だけ流
されたのがありますが、
これは戦後、移動した
神社だつたようです。



写真 3 (上)「まちと神社」宮司さんとの打
合わせ。久之浜の祭りをどのように継承して
いけばいいのか話し合い、冊子「まちと神社」
の制作が開始(2013 年 4 月)。後にキッズ
デザイン賞を受賞する。(右下)祭りの神輿。
(下段)まちと神社・冊子と活動レポート



地元の人とお話しした時に気付いた事ですが、
最初の写真の様に、何もなくなつた所に神社だ
けが残つていたので、これは神の奇跡と思
うかも知れません。でもこれは祖先様が子
孫、孫やひ孫、100 年後の子孫の為に残した
メッセージ・手紙みたいなものではないかと感
じました。神社をこのように配置すると安全と
か、何かあつた時にここに行きなさいとか、も
ちろん神社が絶対安全であるとは言ひ切れませ
んが。

久之浜がかつて震災などに遭つた経験から、
今回の様に全部無くなつた時に、改めて神様を
どこに置くのかを悩み、その上で配置されたの
ではないかという事が透けて見えたような気が
しました。

子孫へのラブレターのようなものを昔の人は
神社を使つて伝えたのではないでしょか。だ
から、今回の震災の後、これからの人達に贈る
手紙を書くのは皆さん、久之浜に居るあなた達
ですよ、と気付いてもらいたかつたのです。

今、それをどのように考えてゆくか、言葉に
頼らなくてもまちづくりを通して考えられるの
ではないでしょか。

露口 キッズデザイン賞を受賞された防災緑地
について説明していただけますか。

栗田 先ほどの神社プロジェクトもキッズデザ
イン賞をいただいたのですが、防災緑地の方は、
更に復興デザイン部門のキッズデザイン協議会
会長賞をいただきました。これはサポートチー
ムというよりも
子供たちが獲つ
た賞なのです。
校長先生のご協
力の賜物です。



2013 年の一学
期の金曜 3・4
限の 1 回に亘つ
て、久之浜第一
小学校で防災緑
地ワークショップ
をしたという
校長先生のご

希望で実施となりました。
栗田 学校の計画で、次年度の教育をどのよう
にするかとなり、一歩踏み込んで、子供たちに
これからの町の事を考えさせたいな、この防
災緑地が出る前に、今しか出来ない事をした
い。こうして先生方と話し合つて防災緑地につ
いて考える授業を計画しました。

これは大漁旗なのですが(*当日会場の壁に
配置)、実は震災の年の夏休みに宿題として子
供たちに描かせたものです。5 年生は水産業の
勉強をします。今、久之浜では船が出せませ
んが、出せたときに掲げる旗を作つてくれな
いか、考えよう!という事で、この 2 点は一番良
い賞をもらったものです。これを奉奠祭の時に、
子供たちからの主張として大人たちに叫びまし
た。久之浜で漁が出来るように頑張つてくだ
さい」と伝えたのです。実は、大人たちはど
うしよう、どうしよう」と言うだけで、こうし
ようというところまで思いが行きませんでした。
そこで子供たちが、僕たちも海が好きだか
ら僕たちの為に漁をしてよ!と大人たちに投
げかけました。今、子供たちも一緒に生きてい
るのだから大人たちと共に、新しい自分たちの
町について考えたい、それがこの防災緑地の学
習です。こうしているうちに子供たちが皆んな
で考えるのですが、例えば私の様に気の小さな
人は、栗田さんの様な強い人に負けちゃうん
ですよ。でも、その小さな気さつて大事ですよ
ね。そばにいて、君、それ良い考えたよ!とつ
て言ってくれる人がほしいな!と思つた時に浮
かんだのがサポートチームの皆さんの事だ
した。最初は金曜日の日中に仕事があるの
に、来てくれる人がいるのかな!と思つたら、い
っぱい来てくれて、すごく良い学習になりました。

栗田 金曜日の午前中というのは、普通の会社
員では無理でして、学生も授業があります。誰
が出来ると考えた時、建築事務所を自分で
主宰している若手の建築家、そういう人たちに
声を掛けましたら毎回 10 名ほど来てくれ
ました。

栗田 来てくれた人には特典があつて、子供た
ちと一緒に給食を食べるんです。約 1 か月

間毎週末でもらい最後には子供たちと仲間の様になりました。

露口 いの年生ですか。これは大人のワークシヨップ？

栗田 大人に対しての防災緑地ワークシヨップは県の主催で、これはこれで進んで行きそうだなと思いましたが。せつかく将来を担う子供たちがこういうことを考えようとしているのですから、校長先生を筆頭に、何か発表できる場所がないといけないのではないかと大人のグループにお話して、大人のワークシヨップの最後の日、学校の一学期最後のギリギリの時間に体育館を使わせてもらって、子供たちが自分の声で、自分のスケッチで発表することになりました。

松本 実は私も大人たちの会に入っておりまして。子供たちが考えた中ですが、皆さんに最初のところで幼稚園の写真をご覧いただきましたが、子供たちは幼稚園に対して思いがすごくて、その場所も防災緑地になりますが、子供たちはワークシヨップでその幼稚園があった場所に、幼稚園が在ったことが思い出せるようにしたいということで、児童公園を作る計画をしたのです。そしてこの計画を発表しました。この声を行政や地域の人達がしっかり聞いてくれて、なんとこの計画に盛り込まれたのです。この時が何点かの子供たちの案が実際の計画に盛り込まれる最後のチャンスでした。(子供たちの案を)これはすごい！考えてもみなかったと取り入れられて、子供たちの考えが未来に活かされた授業になりました。

木村 この頃、私は議員でしたので大人のワークシヨップに参加しました。校長先生がおっしゃった様に、子供たちの良い点というのは、例えば大人たちが並木道を作りたい、ここに素晴らしい公園を作りたいという、君、何を言っているんだ。相当のお金が掛かることだ。として話が消えてしまっただけ。しかし子供から出てくると、役所の職員もさすがに無下には断れないんです。ある意味、子供たちの立場とお母さんの純粋な意見を活用して行政と結び付けたというのは他の地区にはありません。

栗田 (笑) ここに関係した人達、サポーターチームを含めてほとんどの人が大人のワークシヨップと子供のワークシヨップの双方を見ていました。そして明らかに子供にしかない視点、大人が気付かなかった部分と言う場合があったのです。幼稚園の事を言ったのが、たまたま私が担当のグループだったので良く覚えております。最初、子供たちが何を言ったかというところ(防災緑地)で動物を飼えないかとか、ここに広場がほしい、と言うのです。私には子供たちがなぜそのようなことを言うのかよく分かりませんでした。ですから直訳で受け取るのではなく、その奥にある本意を探るように子供たちと話し合いました。

露口 防災緑地が出来ると先ほどの神社は無くなるのではないですか。

栗田 実は、あそここの場所は海岸から50メートルの範囲で、最初の福島県の計画では移動するか壊すか、という話でした。

木村 元々は海岸線から50メートルは緑地にするという事でしたが、今の話の様に、子供たちのワークシヨップから神社を残したいということで、大人からの意見だったら分かりませんが、そこに大人と子供たちの意見が一致して、その部分だけ残る様な形で残すことになった。

露口 そんなことが出来るんですね！公共の場に神道を入れないかと思っていました。

木村 私達当事者の立場からしますと、目の前のごとで精一杯ですから、なかなか細かいところとか、子供たちの自由な発想までは心の余裕がないのが現状です。このようなことから大人も気が付かされて、大切な物を残すという雰囲気になりました。

露口 次に久之浜コレクシヨンというファッ



写真① ファッションシヨール(右)子供たちと一緒にオリジナルの服をつくる。(右)シヨールの前。子供たちが緊張した面持ちでメイクしている。(上)久之浜の風景写真の前でポーズ。

シヨンシヨールをしたとの事ですがそれは？。栗田 この会場に久之浜コレクシヨンのプロジェクトに係わったプロジェクトリーダーが来ています。これはサポーターチームの中から自発的に出た案で、「次は服作りワークシヨップのようなものを作りたい」という話が出てきて、「きっと子供たちが喜ぶのではないか、それは良いかもしれない、やってみよう」と進みました。でも、サポーターチームとしてはこれを通して町を好きになってもらいたい、これをかなえるにはどのようなアプローチの仕方が良いかな？と議論を重ねました。サポーターチームとして久之浜の良い写真を撮りためていたので、ここから自分の好きな写真を一枚選び、「久之浜の風景に似合う服を作りましょう」という事になりました。こうすれば久之浜に対しての思いと愛着を持つのではないのでしょうか。

と発表する場を作ろうという事で、演劇出身のMCの方を連れてきて、バックではDJを付けて音楽を流し、子供たちにメイクをして、小学校の体育館に仮設のランウェイを造りました。正面に自分が選んだ風景を映し出し、この風景を突き破って、服を着た子供たちが現れランウェイを歩く趣向です(写真①)。

木村 なじみの体育館が本格的な、テレビで見えるような場所になったので本当にびっくりしました。参加した子供たちは最初照れくさそうでしたが、本当のモデルさんみたいに参加していたのが印象的でした。これを見て、もっとたくさんの人に参加してもらいたかった、というのが率直な感想でした。

露口 サポーターチームのサポーターが引き金になって、ドミノ倒しのように次々と新しいリーダーが出てきたり、濱中さんのパフォーマンスのような新しい表現が生まれたりしているのは素晴らしいですね。久之浜の美しい風景が見渡せるところにベンチを作ったのもひとつのコマを置いたということですね。プロジェクトを共にすることで、久之浜の人たちもサポーターチームの参加者も確実に育っていつているという、本日は印象に残る会になりました。ありがとうございました。

【完】

【座談会を終えて】第二回 久之浜編
人と人の小さな縁から、若い人・仲間達がサポーターチームというかたちで集結し、行政が係ることなく自然に融合した実例のように思う。ここに関与した若者の行動、心をふるいたせた想いは何だったのか、その見えない部分を必ず記録に残しておいて欲しい。それはこの国に生まれた私たちの宿命として、おそらくは誰もが遭遇し得る事、思うだろう事として。

「久之浜編かわら版」平成二十六年十一月二十日
会場：東京大学農学部・弥生講堂アネックス
○テキスト：小野行雄・高橋圭太郎(情・文委員)
○編集：担当：吉川盛一(情・文委員)
○発行：ACCA 情報文化部会